

第77回日本輸血・細胞治療学会 東海支部例会

プログラム・抄録集

日 時	2021年11月13日（土）13:00～
開催形式	Web開催
例会長	小杉 浩史（大垣市民病院）

第77回日本輸血・細胞治療学会東海支部例会プログラム
2021年11月13日(土)(Web開催)

10:20～11:00 【理事会】

11:10～11:50 【評議員会】

12:00～12:45 【共催セミナー】

13:00～13:10 【総会】

13:10～13:15 【開会挨拶】

例会長 小杉 浩史 先生(大垣市民病院)

13:15～14:45 【シンポジウム】

テーマ 「輸血医療の適正化推進活動」

座長 高橋 健 先生(岐阜県赤十字血液センター)

1 13:15～13:35

「静岡県合同輸血療法委員会活動とI&A」

飛田 規 先生(磐田市立総合病院)

2 13:35～13:55

「愛知県合同輸血療法委員会活動と院内活動～認定輸血検査技師の立場から」

加藤 千秋 先生(名古屋大学医学部附属病院)

3 13:55～14:15

「三重県輸血療法委員会活動と院内活動～臨床輸血看護師の立場から」

濱口 映美子 先生(三重大学医学部附属病院)

4 14:15～14:35

「岐阜県合同輸血療法委員会活動と院内活動～薬剤師の立場から」

竹中 翔也 先生(大垣市民病院)

14:45～14:50 【休憩】

14:50～15:50 【特別講演】

座長 小杉 浩史 先生(大垣市民病院)

「多職種チームによる安全かつ適正な輸血療法を目指して」

牧野 茂義 先生(虎の門病院)

15:50～16:00 【閉会挨拶】

支部長 加藤 栄史(愛知医科大学)

【シンポジウム】 「輸血医療の適正化推進活動」

1 「静岡県合同輸血療法委員会活動と I&A」

磐田市立総合病院

飛田 規

1. 静岡県合同輸血療法委員会は、県内の医療機関における安全で適正な輸血医療を推進するための技術及び知識の普及を図ることを目的として、2006年度に設置された。主な活動はアンケート調査、中小施設の安全な輸血医療推進のための支援、I&Aの受審促進である。基本方針は世話人会で決定し、看護師と検査技師が中心となって構成される診療支援部会が本年度より活動を始めた。コロナ禍のなかで活動も思うに任せないが、聴衆参加型事例検討会の開催を準備中である。また、アンケート調査では、本年初めてI&Aの認定事項34項目について調査を行った。

2. 2021年9月現在のI&A認定施設は149施設で、うち東海支部は35施設（静岡11、愛知9、岐阜8、三重7）で関東甲信越支部に次いで多い。人口100万人あたりにすると2.3施設で、岐阜県と三重県が特に多い。視察員は515人で技師346名、医師88名、看護師67名であり、東海支部の視察員は87名である。2020年度は、コロナ禍のため視察を停止していたが、本年度はリモート視察が開始され、多くの支部で実施あるいは実施準備中となっている。既に離島の中核病院が受審するなど、リモート視察ならではの特性を活かせることも実証された。コロナ禍以前には全く想定していなかったリモート視察であるが、離島や僻地施設の受審に留まらず、支部を越えた視察員交流による視察の均質化さえも視野に入る状況となった。I&Aを新たなステージに発展させるものとして、今後の展開が期待される。

【シンポジウム】 「輸血医療の適正化推進活動」

2 「愛知県合同輸血療法委員会活動と院内活動 ～認定輸血検査技師の立場から」

名古屋大学医学部附属病院 臨床検査部門

加藤 千秋

愛知県合同輸血療法委員会は、平成 21 年に適正かつ安全な輸血療法の向上を目指すために設置され愛知県赤十字血液センターおよび愛知県内の医師で構成されている。近年は愛知県内全域の輸血実施施設に対するアンケート調査を実施し、問題点・課題を徐々に絞り込み、近年では小規模医療機関における輸血の管理体制に焦点をあてている。しかし、その中で臨床検査技師へのサポートには至っていないが、臨床検査技師は、愛知県臨床検査技師会の輸血検査研究班による講演会・例会等による教育面のサポートや、精度管理調査への参加で技術面のサポートも受けている。

医療機関における輸血医療の実施体制に関する平成 30 年度の合同輸血療法委員会のアンケートは、196 施設に調査票を配布し 168 施設（全供給量の 96.7%）から回答があった。この内、常勤臨床検査技師がいるのは 134 施設、同年の愛知県臨床検査技師会が実施した精度管理調査の参加施設は 90 施設であった。ここから、回答した 168 施設中、施設に常勤臨床検査技師のいない 34 施設は精度管理調査に参加する機会もなく、その他で 44 施設は臨床検査技師がいても精度管理調査に参加していないと考えられた（他の精度管理調査に参加している可能性は否定できない）。また日常臨床検査を実施している施設の中で血液型検査を実施しているのは 121 施設、交差適合試験は 126 施設で実施されていた。したがって少なくとも 5 施設は、血液型の検査をすることなく交差適合試験を実施しており、交差適合試験が最後の砦となっていると考えられた。今後委員会は、赤血球輸血を実施する全ての施設を対象に交差適合試験の精度管理調査を実施し、不適合が認められる施設に対しては、委員会として適切な検査方法を指導することで、全ての医療機関で正確かつ安全な輸血検査が実施可能となるように活動することを希望する。

【シンポジウム】 「輸血医療の適正化推進活動」

3 「三重県輸血療法委員会活動と院内活動 ～臨床輸血看護師の立場から」

三重大学医学部附属病院

濱口 映美子

輸血療法は、疾患に伴い血液の成分の量や機能が低下したときの補充療法であり、検査や治療と並行して実施される事が多い。看護師は、患者に輸血を投与する場合に、正しい知識を持って、マニュアルに準じて投与する必要があることは認識しているが、その学習は個人に委ねられていることが多く、輸血投与に不安を持った状態で輸血を実施していることも少なくない。三重県輸血療法委員会看護部会では、三重県内の輸血投与が安全で適正な手技で実施されることを目的として、必要最低限をまとめた輸血基本マニュアルの作成を実施した。また、院内輸血監査チェックリストと院内輸血監査基準を作成し、マニュアルに沿った輸血投与が行えているかを評価できるツールも作成している。三重大学病院では、このマニュアルを一部改訂し、各病棟に配布するとともに、院内の輸血部のホームページにマニュアルの掲載をし、輸血療法に関する講義の際には、マニュアルの説明を行うことで、どこを見れば正しい輸血が実施できるのか知ってもらう機会としている。また、院内の輸血療法委員会に参加することで、院内監査や院内で起こる輸血に関するインシデントの共有を通して、多職種で問題を捉え、実際に働く看護師の課題や問題点を考える機会となっている。患者さんに安全に、効果的に輸血したいとは誰もが考えており、忙しい業務の中で、効率よく正しい知識を得て、病棟の安全な輸血投与の文化を作っていく事が重要であり、そのためには、各部署での実際の困りごとや不安を捉えて解決することが求められる。まずは、私たち輸血認定看護師の存在を認識してもらう事、疑問点や不安点を相談してもらう事、どこを見れば安全な輸血の投与の方法が分かり、どこを見れば必要な知識が確認できるかを伝えていく事が重要で、院内の課題への取り組みと共に、輸血療法員会の看護部会のメンバーと協力して三重県内の安全な輸血療法に繋げていきたい。

【シンポジウム】 「輸血医療の適正化推進活動」

4 「岐阜県合同輸血療法委員会活動と院内活動 ～薬剤師の立場から」

大垣市民病院 薬剤部主査

竹中 翔也

大垣市民病院（以下、当院）において、薬剤師が輸血部門に配置されていたのは約15年前までで、以後薬剤師は兼務による配置にとどまっている。主は当院の輸血部門である「輸血センター」で一元管理されている血漿分画製剤の定数管理業務である。当院のように規模の大きな病院においては輸血部門の独立設置により、検査技師中心の輸血部門体制が進んだ。

2017年に当学会より「輸血チーム医療に関する指針」が示されたことにより、輸血医療における薬剤師の果たすべき役割が初めて明文化され提示された。

院内においては、血漿分画製剤の配置定数の輸血療法委員会による決定のための調整、試験的ではあるが、臨床現場における病棟薬剤師によるプレアボイド体制の整備やインフォームド・コンセントの補助業務などを展開した。

岐阜県合同輸血療法委員会・専門部会活動では、岐阜県薬剤師会推薦委員として、数年ごとに過去10年の間に計5名の薬剤師部会員が専門部会で薬剤師ネットワークを担当し、調査アンケートを行い、岐阜県合同輸血療法委員会主催の薬剤師研修会を開始し、毎年継承してきた。COVID-19パンデミック下において、集合式研修会が昨年度開催断念となり、2021年度にはweb研修会の形で試験的に開催し、小規模や遠隔地の薬剤師の研修参加が可能となったことなどの効用が得られた。

専門部会での地域連携プロジェクトにおいて、大規模病院から多職種輸血チームの一員として薬剤師が加わり、中小規模病院の輸血療法委員会あるいは輸血チームと交流を持ち、職種別の情報交換や相互助言・支援などを行う場が構築されている。薬剤師が当学会で、取得できる唯一の資格が細胞治療認定管理師であるが、様々な免疫療法・細胞治療が承認されてゆく中で、どのように市中病院でその役割に薬剤師が位置付けられてゆくか注目している。

院内のみならず、岐阜県合同輸血療法委員会・専門部会活動を通じ、多職種チームによる輸血医療の構築に関与することが可能となりつつあり、より多くの薬剤師が輸血医療に薬剤師としての知識や経験、特性を生かせる可能性があると考えられる。

【特別講演】

「多職種チームによる安全かつ適正な輸血療法を目指して」

虎の門病院輸血部

牧野 茂義

安全かつ適正な輸血を実践するには、血液製剤の安全性の確保、適正使用の周知徹底、院内輸血管理及び実施体制の構築、そして多職種による輸血チーム医療の確立が重要である。血液製剤の安全対策としては、国、日赤などの施策によって飛躍的に向上した。献血制度の開始から、肝炎ウイルスや HIV に対する核酸増幅検査、輸血後移植片対宿主病予防のための放射線照射、非溶血性副反応防止のための保存前白血球除去や洗浄血小板の製造・供給などを順次導入し、安全な血液製剤が供給されている。適正使用の推進のためには、日本輸血・細胞治療学会（学会と略す）が中心となって科学的根拠に基づいた各血液製剤の使用ガイドラインを作成し、その内容を踏まえて、「血液製剤の使用指針」が大改訂され、文献的考察によるエビデンスレベルと推奨グレードを付けて輸血の適応についてまとめた。各医療機関で輸血責任医師を中心にして、その内容を周知徹底させていく必要がある。「輸血療法の実施に関する指針」では、輸血部門を設置し、輸血業務の一元管理を行い、責任医師と担当検査技師を任命し、輸血療法委員会を設置することが推奨されている。

輸血療法には多くの職種が関わるため、チームを作って実践することが輸血療法の安全性と適正化を推進するための必須条件であり、輸血チーム医療を進めるには、各医療スタッフの専門性の向上と情報共有が必要である。輸血医療の専門性を有する医療スタッフによる輸血医療チームは、輸血医療の現場で安全かつ適正な輸血医療を指導・教育・実践することが目的である。輸血医療チームによる輸血ラウンドの実施や学会認定・臨床輸血看護師の存在によって、輸血過誤は減少し、血液製剤の廃棄率は低下が期待され、ベッドサイドの安全性が担保される。

安全で適正な輸血医療の実施を目指してきた当学会としては、この最後の項目である「輸血チーム医療」について実施・確証していきたい。

第78回日本輸血・細胞治療学会東海支部例会の開催案内
及び一般演題の募集について

1 第78回日本輸血・細胞治療学会東海支部例会

日 時： 2022年2月19日（土）13時から

開催形式： Web 開催

一般演題： 特にテーマは定めません

特別講演： 演題名未定

川崎医科大学

中野 貴司 先生

2 一般演題申込み要項

発表演題数： 8～10題程度

発表時間： 口演7～10分、質疑応答3分を予定しております。

(演題数により若干時間が変わります)

抄録作成方法：抄録は Word あるいは MS-DOS テキストファイルで600
字以内にまとめ、E-mail で提出していただきますようお
願いいたします。

発表資格：発表者は日本輸血・細胞治療学会会員に限ります。

発表申込期限：2021年12月28日（火）

抄録提出期限：2021年 1月21日（金）

申し込み先：〒489-8555 瀬戸市南山口町 539-3

愛知県赤十字血液センター内

日本輸血・細胞治療学会東海支部事務局

Tel (0561) 85-4297 Fax (0561) 86-0176

E-mail : shibukai@aichi.bc.jrc.or.jp